

## 学術研究所主催 主題別研究会 報告要旨(3)

## 第6回 子育て・家族研究会

日 時：平成17年7月13日(水) 14:00~15:30  
場 所：第2会議室  
話題提供：柴山真琴(子ども心理学科・教授)  
話 題：文化間移動から見える日本の保育

## 報告要旨

異国の保育機関への入園には、「新しい環境への移行」と「異文化への移行」という二重の移行が含まれる。日本人幼児が国内の保育園や幼稚園に入園する場合、新しい場所や空間に馴れ(物理的環境への適応)、園独自のルーティンや規則を獲得し(社会文化的環境への適応)、見知らぬ保育者や大勢の同年齢児と関係を作ること(対人的環境への適応)が要請される(Wapner,1978)。中でも一番時間がかかるのが「対人的関係への適応」(特に同年齢児との仲間関係の形成)であるが、園児自身の成長に伴って、仲間関係で必要となる対人関係スキルが質的に変化するためである。異国の保育機関に移行する場合には、上述の適応に「現地語の習得」が加わる。話しことばとしての現地語は、園生活の習慣や規則を獲得する手段にも対人関係を形成する手段にもなることから、現地語の習得は社会文化的環境と対人的環境の両方に関わる適応であると考えられる。本報告では、日本の保育園に入園した中国人男児の仲間関係への適応過程を取り上げ、その検討を通して保育の日本的特徴を探ることを試みた。(本報告は、1993年10月から1994年4月にかけて実施したフィールドワークの成果(柴山,2002;Shibayama,2005)に基づいている。)

観察対象としたのは、東京都内の公立A保育園4歳児クラスに入園した中国人男児(王毅)である。中国で1年間の通園経験を持つ王毅は、入園時点で日本語をほとんど話すことができなかったが、同年齢の男児に積極的に働きかけ、和彦・猛と太郎の3人と仲間関係を形成していった。このうち王毅と和彦・猛との関係は、「第1期(1993.10~1994.1):友好的関係の形成・維持期」→「第2期(1994.2):関係の悪化期」→「第3期(1994.3~4):和彦との関係の回復期」の3つの段階を辿って変化した。関係の変容過程で特に注目されるのは、王毅に対する和彦と猛の解釈が「日本語ができない子」(第1期)から「人の話を聞き入れることのできないわがままな子」(第2期)へと変化したことである。和彦と猛は、「王毅ちゃんのことばがわからないから」という担任の話を聞いて王毅の窮状を推し量り、王毅が優先的にオモチャを使えるように配慮した。ところが、次第にオモチャを順番に使えない王毅に苛立ちを感じ始め、王毅に否定的な感情を抱くようになったのである。

こうした和彦と猛の変化には、①「オモチャの順番使用」規則への態度の違い、②王毅の位置の変化、③差異の見えにくさ、の3つの要因が深く関与していたと思われる。A保育園4歳児クラスでは、保育園のオモチャを順番に仲良く使うことが期待されており、園児同士が「かーして」「いーいーよ」とことばで交渉してオモチャの貸し借りをするのが「正しいやり方」だと見な

されていた。「オモチャの順番使用」規則にそって行動できる和彦と猛から見れば、規則を守らずにオモチャを独り占めする王毅は「わがままな子」に思えたのだろう。この他に、4カ月の間に「ことばがわからない新しい子」から「対等な仲間の一人」へと王毅の位置づけが変化したこと、日本人園児とほとんど同じ外見を持ち保育園では片言の日本語だけを話す王毅と接しているうちに、「発話の違い」という不可視的な差異を意識しなくなっていったことも関係していたと思われる。

さらに4歳児クラスの2人の保育者も、友達とオモチャを順番に使えない王毅の状態を「わがまま」と解釈していた。保育者の1人は、「王毅ちゃん、何回言ってもわからない」と言う和彦に「うん」と同意することもあった。一般に日本の保育園や幼稚園では、お気に入りのオモチャを主張して使い続ける子どもよりも、自分の要求を抑えて他児にオモチャを貸すことができる子どもの方が賞賛されがちであるし(柏木,1988)、園児同士の交渉は園児に望ましい行為を習得させるための有効な学習方法だと考えられている(Lewis,1984)。A保育園においても、園児が自分の要求を抑制的に調整して、他児との関係を円滑にするために自発的に「オモチャの順番使用」規則を守ることが奨励されていた。一方、中国の保育者達は、「幼児は何が正しい行為で何が正しくない行為かを知らないのだから、オモチャをめぐるトラブルや園児同士の喧嘩には教師が必ず介入して解決するのが有効な方法だ」と考えている(Tobin, Wu, & Davidson, 1989)。この場合、園児達は自分達にとっての規則の意味を理解しないままに、保育者の命令に従うために規則を守りがちとなる。来日前に中国の幼稚園で、「保育者の命令としての規則の遵守」を経験していた王毅にとって、「自己抑制を基層においた自他の要求調整」と「仲間関係調整の手段としての規則の遵守」は、馴染みのない学習だったものと思われる。

以上から、王毅が「わがままな子」と見なされるようになっていく過程は、担任保育者と日本人園児との間に「オモチャを貸せないこと＝わがまま」という文化的知識が共有されている関係の中で、王毅と接触の多い園児による解釈、担任による解釈、園児と担任の共同解釈によって形作られていたと考えられる。また、保育の日本的特徴は、固定的な実体として存在するというよりも、異文化児と日本人園児・保育者との相互交渉過程において照らし出されることが示唆される。「オモチャの順番使用」に関する学習構造は、中国から来た幼児との相互交渉によって立ち現れた特徴と言える。文化間移動をした幼児の発達支援においては、「何ができないのか」から「なぜそれが問題として見えるのか」へと問いを転換させ、自文化の保育実践に埋め込まれた暗黙の前提を省察する必要があるだろう。

### <引用文献>

- 柏木恵子, 1988, 幼児における「自己」の発達, 東京大学出版会.
- Lewis, C., 1984, Cooperation and control in Japanese nursery schools. *Comparative Educational Review*, 28(1), 69-84.
- 柴山真琴, 2002, 幼児の異文化適応過程に関する一考察, 乳幼児教育学研究, 11, 69-80.
- Shibayama, M., 2005, Peer adjustment processes of a five year-old Chinese boy in a Japanese preschool.
- Shwalb, D., Nakazawa, J., & Shwalb, B. (Eds.), *Applied Developmental Psychology*, Information Age Publishing, pp.321-345.
- Tobin, J., Wu, D.Y.H., & Davidson, D., 1989, *Preschool in three cultures*, Yale University Press.
- Wapner, S., 1978 Some critical person-environment transitions. 日本心理学会発表論文集, 42, S61-62.